

闘病記ブログの執筆による闘病者の心の癒やし

森住 瑞樹

仲村ら (2014)は、文章から執筆者のうつ傾向を測る、「文章のうつ傾向指標」を提案した。その指標を用いて、闘病記ブログの記事本文から、執筆者 21 人の長期にわたるうつ傾向の時系列的変化を分析した。その結果、闘病記ブログの長期執筆は、執筆者のうつ傾向の改善につながり得ることが示された。この方法により、執筆者の長期にわたるうつ傾向の変化を分析することが可能となったが、先行研究には、データ数の少なさと、うつ傾向指標の精度に課題があった。そこで、本研究では、データ数を増やし、先行研究の結果を再確認した。心の癒やしを、うつ傾向を測ることによって調べることにし、仲村らの手法に基づき、闘病記ブログの記事本文から執筆者のうつ傾向を測った。その際、文章のうつ傾向指標の改善を図った。先行研究において、執筆期間全体を通して癒された執筆者は、どの程度の割合を占めるのかについて明らかにされていない。そこで、執筆期間全体を通して執筆者の心理を測り、癒された執筆者の割合を調べた。その上で、癒された執筆者の特徴を調べた。

分析対象として、闘病記ブログのポータルサイト「TOBYO 図書室」から、先行研究を踏まえて設定した諸条件を満たす 399 ブログを選出した。文章のうつ傾向指標は、うつ闘病記ブログと非うつ闘病記ブログを学習材料とする機械学習によって構築された分類器を用いて、分析対象の文章がうつ闘病記ブログの文章と同様の特徴を持つ程度を測る指標である。そこで用いられる素性を極性辞書中の単語群に変更し、表記ゆれに対応した素性検出を行ったところ、文章のうつ傾向指標の分類精度が 73.5%に向上した。その指標を用いて、先行研究の結果を再確認したところ、先行研究と同様に、分析対象全体の傾向として、闘病記ブログ執筆の継続に伴う執筆者の心の癒やしが観測された。次に、執筆期間全体を通して執筆者の心理を測り、癒された執筆者の割合を調べた。ブログ記事それぞれのうつ傾向指標と投稿日のデータから、執筆者ごとに、うつ傾向指標の変化について単回帰直線の傾きを算出し、癒やしの有無を調べた。その結果、癒された執筆者の割合は 48.0%であった。したがって、分析対象全体の傾向としてではなく、執筆者ひとりひとりについて調べると、執筆期間全体で癒された執筆者は多くなかった。そして、癒された執筆者の特徴を調べるために、癒やしの有無と執筆の諸条件に関する独立性の検定を行った。その結果、執筆期間が長い執筆者、執筆頻度が高い執筆者、執筆記事に対する読者からのいいね!が少ない執筆者は癒された割合が高かった。読者からの反応が執筆者の心理に影響すると言える結果が得られたが、好意的な反応と考えられるいいね!が多い執筆者の方が癒されなかった理由を明らかにすることはできなかった。そのため、闘病記ブログ執筆が有効となる諸条件についてのさらなる分析が今後の課題である。

(指導教員 歳森敦)